

各地で話題の病害虫

パパイヤ輪点ウイルス-パパイヤ系

英名: papaya ring spot virus - papaya strain

平成3年、沖縄県宮古島でパパイヤ輪点ウイルスの/パパイヤ系(PRSV-P)が初めて分離され、平成4年に再調査した結果、石垣島でも同ウイルスによる被害が確認された。わが国では、従来から/パパイヤに病原性を示さない/パパイヤ輪点ウイルス-スイカ系(PRSV-W)の発生が各地のキュウリやスイカなどで報告されていたが、PRSV-



沖縄県農業試験場 河野伸二氏提供

Pの発生は初めてのことである。

このウイルスは、ひも状(12-13×700~800nm)でPotyvirusグループに属し、アブラムシなどによる非永続的伝搬が主要な伝染経路である。

病徴は黄斑モザイク及び奇形葉モザイク症状を呈し、/パパイヤ奇形葉モザイクウイルス(PLMV)による病徴と極めて類似している。また、果実には輪紋やこぶが生じるため、商品価値がなくなる。

近年、ハワイの/パパイヤ主要産地でも大発生して大きな問題になっている。

防除対策としては、周辺圃場のり病植物を除去し、定期的にアブラムシを防除することが必要である。特に、育苗時には寒冷紗などでアブラムシの侵入を防止することが重要である。

シロスジオサゾウムシ (新称)

学名: *Rhabdoscelus lineatocollis* (HELLER)

平成5年3月に沖縄本島中部でサトウキビの茎を食害しているゾウムシが発見され、九州大学の森本桂教授が同定した結果、シロスジオサゾウムシであることが判明した。本種は、フィリピンに分布し、ヤシ類の害虫として知られており、昭和51年に沖縄本島中部のヤシで発見されたことがあるが、サトウキビへの加害は初めてのことである。



那覇植物防疫事務所

成虫は体長12~14mmで、体色は濃褐色で胸背部と腹背部に白っぽい筋があるのが特徴である。老熟幼虫は体長13~15mm程度で、頭部は褐色で他は乳白色である。蛹は15mm内外で、食害したサトウキビ茎内部の繊維で25~30mmの繭をつくり、その中で蛹化する。被害は、サトウキビの地際部~中位部の茎内部に穿孔し、激しく食害するため、被害茎の内部は赤腐症状を呈し、著しい場合は枯死する。

本種によるサトウキビへの加害は初めてのことであり、現在、発生生態の解明や有効な防除法の確立が進められているが、当面、発生ほ場では、早めに収穫し、被害茎は発生源になるので焼却することが重要である。

クロトンアザミウマ

学名: *Heliothrips haemorrhoidalis* (BOUCHE)
英名: greenhouse thrips

大分県で加温栽培されているハウス内のカボスと静岡県柑橘試験場で省農薬栽培されている温州ミカンにクロトンアザミウマが発生し、葉や果実を加害していることが、平成5年3月と12月に相次いで確認された。

雌成虫の体色は暗～黒褐色で、扁平で幅広く、体長は1.5～1.8mmである。頭部と前胸背は網目状の模様があり、脚は黄白色である。わが国では、雄は未確認で、雌だけで単為生殖している。



静岡県柑橘試験場 土屋雅利氏提供

本種は、雑食性で一般には温室害虫として知られているが、関東地方以南では野外にも生息しており、卵で越冬する。被害は成虫と幼虫が葉脈に沿って吸汁することによって葉にシルバリング、白化がみられ、ひどくなると萎凋枯死し、落葉する。果実では、果実と果実が接したところに好んで寄生し、白っぽいかすり状になり品質が著しく低下する。

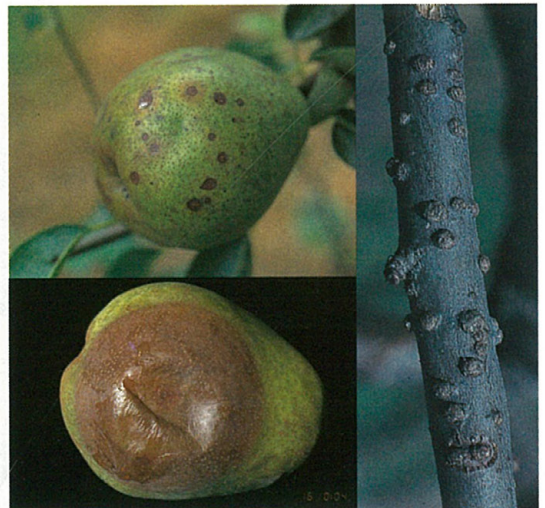
防除対策については、本種の周年経過や生態に関する知見が少なく、今後の研究が待たれている。

近年、米国のカリフォルニア州ではオレンジやアボカドの果実で大きな被害が報告されており、本種の発生動向には注意する必要がある。

セイヨウナシの輪紋病

学名: *Physalospora piricola* NOSE
英名: Physalospora canker

近年、果物に対する消費者のニーズが多様化し、セイヨウナシ独特の味覚が再認識され、従来の缶詰加工用でなく、生食用品種の栽培が各地で増えている。生食用は、収穫後一定期間保管して追熟させる必要があるが、この追熟過程で腐敗が発生し問題になっている。この主な原因は、輪紋病である。また、省力、多収量を目指して、わい化台木を利用した無袋栽培が増えており、この栽培法による輪紋病などの防除対策が重要になっている。



山形県立園芸試験場 菊地繁美氏提供

病徴は、果実では濃褐色で同心輪紋状の円形病斑をつくり、その外周に褐色の小斑点の阻止帯を生じ、その周辺から軟化腐敗症状を呈する。樹上でも発病するが、ほとんど追熟中または輸送中に腐敗する。

枝には2～3mmの丸く隆起したイボ状の病斑を形成し、周辺は陥没する。この病斑部の柄子殻で胞子が形成され、降雨と高温条件によって胞子形成が促進され、発病が多くなる。

防除対策は、枝病斑を除去して、飛散胞子を少なくすることが大切である。薬剤防除としてボルドー液の散布が有効であるが、今後、治療効果のある薬剤の開発が待たれる。